

# 米欧亜回覧

第56号  
発行

特定非営利活動法人  
**米欧亜回覧の会**  
編集  
広報メディア委員会

## 伊藤博文に新しい解釈

### 瀧井一博氏講演 七月の全体例会盛況

第五十二回全体例会は、七月十九日に国際文化会館講堂で開催され、日曜日にも係わらず六十名が参加し盛会となった。会務報告のあと、第二部として歴史部会担当の講演会が行なわれた。テーマは、伊藤博文公没後百年を記念して「伊藤博文の考えた国のかたち」で、講師には、国際日本文化研究センター准教授の瀧井一博氏を招いた。



7月19日全体例会 (国際文化会館)

伊藤博文のイメージは、司馬遼太郎によって、哲学なき政治家、理念なき権謀家と見なされてきた。又、司馬は明治の歴史は伊藤なしでも描けるとまで言いきつたが、果たしてそうであるうか。

瀧井氏は、むしろ伊藤は、能弁と幹旋力を充分に發揮して最後まで国民政治を追究した真の「デモクラシーの思想家」、「知の政治家」であったと説き、伊藤博文に新しい解釈を提示した。

(詳細は二・三頁)  
**新年懇親例会は一月十九日、オランダをテーマに開催!**

使節団が訪問した国をテーマにした新年懇親会は、当会の新春の恒例企画である。一九九九年からのテーマ国は、仏(フランス)、独(ドイツ)、英(イギリス)、伊(イタリア)、米(アメリカ)、瑞(スウェーデン)、露(ロシア)、白(ベルギー)、丁(デンマーク)、露



アムステルダムの王宮 (『実記』)

(ロシア)、瑞(スウェーデン)と毎年続き、来年の蘭(オランダ)で、米欧の訪問国十二カ国を一巡することとなる。

米欧訪問国シリーズ最後の新年懇親例会の内容は決まり次第お知らせするが、開催は、二〇一〇年一月十九日(火)夕方、会場は日本プレスセンタービルのレストラン・アラスカを予定している。

### 「企画委員会」を新設!

十月の幹事会で、会のリニューアルを目指して「企画委員会」を新設することになった。当面のメンバーは、幹事有志数名、会員有志数名で、委員長には泉三郎氏が、担当幹事には石垣禎信氏が当たる。第一回の会合は、十一月四日(水)、十八時三十分〜二十一時、国際文化会館セミナールームで開催する。一般会員の参加も歓迎です、意欲ある会員の出席をお待ちしています。(詳細は四頁)

今回の新政権の誕生は、近代日本における「歴史的」な変革であり「静かなる革命」ともいわれられている。そして、新旧政権の交代からまだ一ヶ月も経っていないのに、内政、外政ともすでに大きな「チェンジ」が実感され、それがいよいよ現実のものとなりつつある。世界の舞台においても、鳩山首相の国連総会並びに安保理事會でのスピーチは、日本にとって歴史上画期的な発信になったといっているだろう。オバマとハトヤマという新コンビの登場は、いずれも世界の文明的な大変化の潮流にのったものであり、それに期待するところは大きなものがある。

## 新政権の誕生、「世界気運ノ変」、チェンジ!

泉 三郎

史の中で多くの実績をあげてきた。それはニュースの五十五号までを歴覧すれば明らかであり、その間に特筆すべき事業としては、二回の国際シンポジウムの開催とその記録の出版があり、また「米欧回覧実記」の現代語訳全五巻の企画出版やDVD「岩倉使節団の米欧回覧」の企画制作がある。これらは外部からも高く評価されており、これからも長く読まれ、記憶されていくであろう。

かつて「米欧回覧実記」で久米邦武は「世界気運ノ変」によるものであり、それに伴う大改革は「人為にあらざる、ほとんど天為なり」と。わたしたちも、それから百四十年を経て、いまやその新たな「世界気運ノ変」のただ中に遭遇している感じがする。

さて、当会も設立十三年目を迎え、変革の時を迎えている。その十二年余の歴史の中で、多くの実績をあげてきた。それはニュースの五十五号までを歴覧すれば明らかであり、その間に特筆すべき事業としては、二回の国際シンポジウムの開催とその記録の出版があり、また「米欧回覧実記」の現代語訳全五巻の企画出版やDVD「岩倉使節団の米欧回覧」の企画制作がある。これらは外部からも高く評価されており、これからも長く読まれ、記憶されていくであろう。

第52回 全体例会

講演『伊藤博文の描いた国のかたち』  
没後百年を記念して

瀧井一博氏

七月例会は七月十九日(日)、国際文化会館講堂において開催された。出席者は六十名。十三時三十分より始められた第一部、全体例会においては、各部会報告が行われ、実記を読む会 桑名、英文実記を読む会 小林、現未來部会 西井、歴史部会 小野、総務 山田の幹事各氏より各部会の活動状況について簡潔な報告があった。

続いて十四時四十五分より第二部、講演会が行われた。今回のテーマは、「伊藤博文の考えた国のかたち」――博文

公没後百年を記念して――講師は、国際日本文化研究センター准教授の瀧井一博氏。平成二年に京都大学法学部卒業という若き研究者である瀧井氏のプロフィールを国際日本文化研究センターのホーム



講演する瀧井一博氏

ページで確認すると、(専門分野) 国制史、比較法史、(現在の研究テーマ) 明治立憲体制の知識社会的かつ国際関係史的研究、(研究のキーワード) 立憲主義、明治国制、伊藤博文、帝国大学体制、国制知とある。豊富な実績をもとに、通説を覆すような伊藤博文研究の新たな一面をしめす講演内容で感銘を与えた。参加者の関心も高く、時間切れになるまで続いた熱心な質問に答えていた。

なお、講演終了後華珍楼において懇親会が開催され、講師を含め二十一名が参加、和やかに、賑やかに歓談する機会を持つことができた。

講演要旨

伊藤博文のイメージは、司馬遼太郎によって、哲学なき政治家、理念なき権謀家と見なされてきた。又、司馬は明治の歴史は伊藤なしでも描けるとまで言いきったが、果たしてそうであろうか。瀧井氏は、同時代人の中江兆民が伊藤を「読書人」と評し、津田梅子がトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』を読んで

勉強している伊藤に尊敬の念を覚えたように、むしろ伊藤は、能弁と斡旋力を充分に發揮して元老たちを良くまとめ、最後まで国民政治を追求した真の「デモクラシーの思想家」、「知の政治家」であったと捉えている。

伊藤は、憲法の制定を通じて、この国のかたちを描こうとした。しかし憲法の成立は終着点ではなく、出発点。万物は流転するという秩序観を持つていた。草案を書いた井上毅を本場の憲法の立法者とみなす学者もいるが、明治十四年の政変後、憲法調査に乗り出して渡欧した伊藤は、その師シュタインの教えを咀嚼して、よき憲法を希求することとは勿論のこと、その憲法を生かすも殺すも、行政機構の確立と人民の知力、学力を高めて、本当の意味での国民政治を確立しなければ意味がないと考えた。そして、国民への情報開示と、君主と臣民の権利と義務を明確に規定することを憲法の基本とすることに腐心した。

はその意味では、一種のシンクタンクでもあると考えた。すなわち、政党は、権力を奪取するための組織や、敵討ちの政党ではなく、利害の調整―譲歩と妥協の政党を志向すべきとした。この考え方は、現在の日本にもいまだ実現しきれない、実に今日的な発想を保持していたと考えられる。

伊藤が理想とした国民の姿は、①文明の民として、学問を修めて自らの意思で職業を選択し、それを通じて自己実現を図る存在、②専門的職業人として、実業の各方面で自己の知識を実地に応用し、③経済人としての本分を全うするために政治的であらねばならないと考えた。

憲法制定に関しては、伊藤は憲法調査途上で出会ったウィーンのローレンツ・フォーン・シュタインを憲法の師として明治憲法を構想した。瀧井氏が発見した六通(ベルリンに三通、チェコに三通)の伊藤の親筆の手紙によれば、伊藤の考えた天皇制は、天皇を中心としつつも、臣民の権利を守るために、君主権の制限を強く意識していたことが判明している。天皇は国際的には外交上のシンボルとし、国内的には統合の中心的立場の調停者役を望んでいた。それは、歴史家に問題にされる



関心の高さを示す熱心な質問が続いた

伊藤は最後まで軍部の大陸進出に抑制的、批判的であった。韓国併合に関しても、韓国の儒林の偏重が国の自立を妨げていて、西洋化に対応できていないことに不安を感じ、日本的になれば自立できるだろうと考え、自立した暁には、韓国に議会を作ることまで考えて、韓国内の暴徒と市民とを区別せよと言った。その上で、軍部を大陸から韓国まで引き戻そうとも考えていた。彼が悪役を引き受けて、文官が軍の指揮命令権を握ることで軍の暴走を狙ったのも、そんな意図があった。

岩倉使節団の目的のひとつは条約改定のための視察と調





DVD

(文責) 小野 博正  
(写真) 橋本 吉信

查にあった。条約改定の前提が、立憲主義による欧米的近代政治体制の確立による国民国家の実現であることを悟って帰国した使節団の総仕上げが、いわば憲法制定であり、付随の行政機構の整備であった。それを使節団の生き残りの伊藤が実現させて、この国のかたちを整えた。伊藤の死後、残念ながら日本は、伊藤の理想とした国のかたちから少しずつつれてしまった。

この講演の後、囚らずも半世紀以上この国の政治に君臨した旧弊の自民政権が倒れ、新しい政治を目指す民主党政権が成立した。我々はいま、期待と不安を抱きながら民主党政権の一挙手一投足を注視している。我々は、改めて二十一世紀の国のかたちはどうあるべきかを再考する時期にさしかかっているようだ。それは、政治家のみに任せるべきではなく、国民こそって真剣に取り組むべき課題であろう。そんな感慨を、この講演を聞きながら改めて感じた。

DVDを活用した講演会

泉三郎氏、国民会館(大阪)で講演、大好評!

総選挙での民主党の圧勝で興奮さめやらぬ九月五日(土)、大阪城の天守閣を目前にする好立地にある国民会館の十階大ホールで、泉三郎氏の「明治をつくった男たち」岩倉使節団とその成果」と題する講演が行われた。会場は三百五十名を定員とするが満員の盛況で、十五分ばかりの映像(DVD)もまじえ熱のこもった講演となった。聴衆は終始熱心に聞き入り、質問も活発だった。

国民会館は、福沢門下の逸材で、大鐘紡の生みの親であり、代議士でも言論人でもあった武藤山治氏により、「政治の浄化は選挙権をもつ国民の教育にかかわる」との考えから、昭和八年に私財を投じて設立・建設されたもので、その後平成二年に建て替えられたが、その間、ほとんど休み無く毎月「武藤講座」が開催され、今回はその九百二十三回目にあたっていた。

当日の講演内容については、国民会館のホームページに「速報」が掲載されているので、参照されたい。

なお、当会の関西支部からも十名近くが参加し、講演後

は館長室で筆者ら二名が、館主である武藤治太氏(武藤山治氏の孫、大和紡績会長)や専務理事の貞利氏らと泉三郎氏を交えてしばらく歓談することが出来た。講演は時宜にも適して大好評との評価で、用意した著書はまたたくまに売り切れになった。岩倉使節団に対する関心の深さをあらためて感じ、会員の一人として誇らしげに思った次第である。

高松市民大学でDVDを活用した講演会

山田 哲司

去る九月二十六日(土)、香川県高松市において開催された、高松大学・高松短期大学主催、高松市共催による「高松市民大学二〇〇九」講座に招かれ、「世界の中の日本の役割を考える」―岩倉使節団を出発点として―を演題に講演を行なった。この講座は一九九九年にスタートして十年、市民のなかに定着して今日に至った歴史のある講座だが、私は二十年ほど前に高松に在勤したこともあって、当時の青年会議所の主要なメンバーの方々はじめ地元の方々との交流が続いており、このたびこれらの昔馴染みの方々の推薦もあり、講演が実現した。

社団法人 国民会館ホームページ  
9月の第923回武藤記念講座の講演内容速報

ノンフィクション作家「明治を創った男たち 岩倉使節団とその成果」

明治四年、誕生間もない維新政府は革命的大手術であった廃藩置県後であるにも拘らず、岩倉具視ら維新革命の立役者が揃って西洋文明の探索に出かけた。それは西洋列強の圧倒的パワーに対する誇り高き日本人の果敢な挑戦であった。この使節団の成果により「富国強兵」の国家ビジョンが確立されたが、その後「強兵」は有頂天となって太平洋戦争で敗れ、戦後は自国を防衛する気概すらなくしている。一方で「富国」は世界の経済大国になったものの、最早その絶頂期を過ぎている。今こそ我々は明治創業時の誇り高き日本人から「侍マインド、勇気、そして知恵」を学び、日本を再び「上り坂」に持っていかねばと、語りかけられました。

(http://www.kokuminkaikan.jp/)

テーマは出来るだけ国際的な視点でとの要請もあり、またまた、今年の三月、同じテーマで「二〇〇六年・国際シンポジウム」の報告書が出版され、その編集作業にかかわった者として、お話ししやすい事柄でもあるので、上記のテーマで、お引き受けした次第である。講座の参加者は比較的少人数、男性中心で(女性は二割ぐらい)、ご年配の方がやや多いかなという印象だったが、皆さん熱心にメモを取りながら聞いていただき、緊張しながらの講演となった。講演は序論の後、「使節団」について概論的・包括的に理解を深めていたため、岩倉使節団の「DVD第一章(約十四分)」を上映したが、これは有効な方法

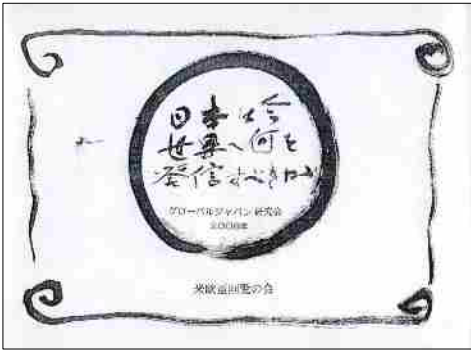
で、講演時間によつてはDVDの活用により、より充実した内容でお話しすることが出来るとの印象を受けた。終了後、大学関係者の方々の懇談では、郷土史に詳しい四国新聞出身の方や、歴史の専門家もおられ、地域主催のこのような会(講座)においても明治以降の近現代史は、関心が高い事項であることを確認できた。また、場所を変えて行われた、青年会議所OB会の方々の懇談会でも同様の関心が寄せられ、われわれの会も、東京・大阪中心の展開ではつかみ得ていない各地域に広がる多様な年齢層の同学の士(方々)に、このような機会をおして呼びかけていくことが大切であることを改めて痛感した。

### グローバルジャパン研究会の新展開について

泉三郎

グローバルジャパン研究会は、「世界の中の日本の役割」をテーマに会を重ねてきたが、このたび一年間の研究成果を報告書にまとめた。それは「日本は今、世界に何を、発信すべきか・二〇〇八」と題するもので(写真は表紙)、A四版百六頁に及ぶものである。内容は、参加者の発表・寄稿と質疑応答及びまとめからなっており、目次を紹介すれば次の通りである。

- 一. 日本において「近代を超える」とはどういうことか (吹田尚一)
- 二. 世界に発信する日本文明の課題(永池栄吉)
- 三. 食欲収奪文明から最適循環文明へ (泉三郎)
- 四. 西洋医学と東洋医学の比較 (西井易徳)



グローバルジャパン研究会・報告書

- 五. 日本美術からの世界への発信 (塚田晴可)
- 六. トヨタウェイを世界へ(石坂芳男)
- 七. グローバル・デジタル VS ローカル・アナログ(石垣慎信)
- 八. 日本は世界のモラルリーダーに (森本淳之)
- 九. 共生(シンビオシス)から共創(コビベンス)へ (小松優香)

まとめ、地球文明時代の思想を求めて(泉三郎)  
今後の活動については、九月における二回の会合を経て、「今後の活動のシナリオ」が策定された。内容は次の通り・・・

- \* 基本的な考え  
メインテーマは引き続き「世界の中の日本の役割」とし、これまで研究を踏まえてさらに外部から一線の講師を招聘して内容を充実させる・・・
- \* 具体的な手順  
一. メンバー間でのテーマの絞り込み  
二. 各分野のオピニオンリーダーを招いての講演、ディスカッション  
三. 内容の編集及び発信、それに関する戦略と計画  
四. 組織の編成と予算の確保

現在メンバーは昨年来参加している有志をコアとしているが、この趣旨に賛同する方

は大歓迎なので是非参加してほしい。  
なお、報告書については、希望があれば、実費千五百円で頒布するので、事務局まで申し込んでください。

### 新たに「企画委員会」発足！ 会のリニューアルを目指して

十月の幹事会で、あらたに「企画委員会」の新設が決まった。

これは、本会の抱える諸問題を集中的に討議し、会のリニューアルを目指して対応策を提言する組織であり、会の高齢化に対処してより若い世代の会員拡大を目論むチャレンジといってもよい。まず、会全体として、また部会活動についても、それぞれ問題点の洗い出して整理し、それへの解決策を探ることを目的とする。

メンバーは幹事有志と会員有志によって構成するものとし、委員長には泉三郎氏、担当幹事には石垣慎信氏が当たる。

- ・ 問題点としては、当面これまでも幹事会で挙げられていたものを中心に討議をすすめる。主な項目を挙げれば
- ・ 会員拡大、とくに若い世代の会員をどう増やすか
- ・ 魅力ある会にするためにどうしたらいいか
- ・ 会員相互の親睦、交流をは

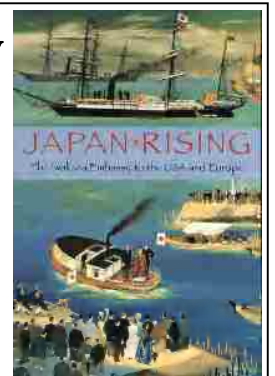
かるには  
多彩な会員の人的資産を生かす方法はないか

- ・ 各部会でのこれまでの研究資料を生かす方法はないか
- ・ 本会企画の「現代語訳・米欧回覧実記」やDVD「岩倉使節団の米欧回覧」をもっと生かす方法はないか
- ・ NPOとしてなすべきことはないのか
- ・ ウエップ、インターネットの活用、メディアへの広報・宣伝について
- ・ 事務局の充実、財政基盤の強化
- ・ などなど

いずれは全会員からも意見を聴くつもりで、近々アンケートを作成・配布して回答を要請することも考慮する。  
具体的なスケジュールとしては、ここ三ヶ月ほどの間に何回か会合を重ねてならんかの具体的提案をすることを目指し、幹事会の討議・承認を経て、来年度の方針として決定していく予定。

### 英訳版「米欧回覧実記」ダイジェスト版発刊、ペーパーバック版は約三千元

[JAPAN RISING ~ The Iwakura Embassy to the USA and Europe] の題名で、英訳版「米欧回覧実記」のダイジェスト版が世界的に権威あるケンブリッジ大学の



### Japan Rising: The Iwakura Embassy to the USA and Europe

著・・・Kume Kunitake  
編集・・・Chushichi Tsuzuki  
R. Jules Young  
出版社・・・Cambridge University Press  
価格・・・ペーパーバック版 US\$ 28.99  
ハードカバー版 US\$ 85.00

出版局から出版された。編集は都筑忠七氏とジュール・ヤング氏で、原本の五冊本が五百二十八頁の一冊に要約され、大変読みやすく、入手しやすくなった。今後、英語国だけでなく世界中で読まれることになるであろう。価格はペーパーバック版で約二十九ドル。為替で多少の変動があるが、十月初旬の時点で二千七百〜三千円程度であり、丸善、アマゾン・ドットコムや紀伊国屋に注文すれば手に入る。



寄稿 平成の米欧亜回覧

カダフィー政権四十周年を迎えるリビアで感じたこと

多田 幸子

私は近年アジア、イスラム圏を中心に遺跡巡りを重ねてきたが、昨年、独裁政権国として敬遠されているリビアで思いがけない現実に出会った。何の予備知識もなく行ってみて、まず驚いたのは現地の人々がとても明るく楽しげなこと、素朴で穏やかで日本で今までもっていったイメージとまったく違っていること。

ご承知のように「大量破壊兵器の破棄」を宣言し「経済制裁」の正式解除を受けたのが二〇〇三年、「テロ支援国家リスト」から外されたのが二〇〇六年五月で、それなりの覚悟で行ったが、直ぐにそのような警戒を解いてしまうような暖かさを感じた。町に



リビアの遺跡の前で (2008年10月)

はカダフィー氏の写真が至るところに貼られ三十九という数字が踊っている。昨年は、無血革命から、三十九周年を迎えていた。

それで、できるだけ旅行中に会った町の人々に聞いてみた。多くの人が、四十年前の王権時代と比べずっと生活が良くなったこと、国民の意見が政治に反映できる仕組みになっていくこと、カダフィー氏も近頃はとつてもよいく人の意見を聞くようになってきたと語った。聞くところによれば、国民の九十%が満足しているとか。因みにリビア旅行には必ずガイドのほかに同行警察官をつけることが義務づけられ、私たちにも警察官が最初から最後まで二週間ほどついてきた。武器は何も持たず、事が起こってもとても助けてくれそうもない。はたから見るとこれ以上ないご商売に思えた。そんなことも面と向っていえるほど、すっかり仲良くなった彼を通訳にして聞いたのが前記のようなことで、彼を含め町の人も本当の気持ちを持っていると思われたが、真実は分からない。因みにここでは生活必需品がうそみたいに安い。例えば、お米一kg四十五円、パン十本が四十五円、砂糖一kg九十円、牛肉一kg四百五十円。そしてオイルはさすが

産出国、一円、二円の単位である。基本生活品は全部、国が統制していて、オイルマネーがそれに費やされるそうだ。(労働者の平均賃金は三(四万円)これらの物価も、例の警察官から聞いたが、後に市場を回って事実であることを確かめた。

一九七六(七九年)に発表したカダフィーの緑の書、第三世界理論も日本語訳が現地で売られていたので、読んでみた。それには民主主義問題の解決、経済問題の解決、普遍理論の社会的基盤の三部に分かれていて、政治、経済、社会のあらゆる問題、家族、民族、女性、黒人、マイノリティについて言及されている。そのすべてが実行されているか否かは別として、リビアでは公立の小学校から大学まで、すべての教育費は国がもつ。住居も必要不可欠のものとしてその家族所有となる。また、いみじくも「黒人が世界を率いることになる」と謳っている。

日本に戻って、連日新聞やTVで繰り返し報道される派遣難民のこと、住む家も失ってしまった多くの人々の苦しみや聞くにつけ、果たして先進国の民が幸福かどうか大いに疑問を感じているところである。

(二〇〇九年一月記)

デンマークに見る国のかたち

浜地 道雄

会の代表泉三郎氏の要請を受けて、米欧回覧の記録スライドの英語版解説をそれこそ徹夜作業でやったのはもうひと昔前。米国編、欧州編それぞれ米国人若者に手伝わなくても良かった。それから、はずみがついて米国西海岸、東海岸と二度に分けて、二人で各地の日米センターで「映像ロードショー」を挙行したのは楽しい思い出。首都ワシントンDCでは大使館広報部公使だった近藤誠一氏にお世話になった。その近藤氏は現在駐デンマーク大使で、不思議な糸でつながっている。

話は一八七三年に遡る。四月十八日、岩倉具視一行はデンマークのコペンハーゲンに到着、この十八万人の小さな首都で「海外電信会社」の大宴会に招かれた。そのわずか二年前、上海―長崎―ウラジオストックを結ぶ海底通信ケーブルを敷いたのがこのデンマークの大北電信会社だ。さて、東京の新宿西口。そのKDDIビルの正面にデンマークの童話作家アンデルセンの可愛い切り絵をベースとしたレリーフが飾られている。説明には「一九七四年のKDDIビル竣工に当たり、(デンマークの)大北電信社



アンデルセン切り絵のレリーフ (新宿KDDIビル)

からの申し入れでできたもの」とある。アンデルセン晩年の童話「大きなウミヘビ」は、大西洋に敷設された世界最初の海底電信線を題材にしたものである。

北海道よりもやや狭いこの北欧の「福祉国家」の根は、相互信頼にもとづく「税負担」と「個人情報システム」だ。Japan Times(二〇〇八年十月二十六日)は「デンマーク人は信頼こそが幸福の鍵と信じてる(拙訳)」と印象的な報道・解説をしている。

翻って日本。民主党が政権をとり「大CHANGE」が期待される今、鍵は個人負担の意識と主導政府の倫理感。双方の信頼感。技術的にはそれをつなぐITシステムである、と筆者は主張する。

KDDIのモニュメントを見るたびに、岩倉使節団を思い出し、デンマークにならうべき「国のかたち」に思いがいたる。

(二〇〇九年十月記)



ローマ水道施設のアーチ門遺跡  
 (『実記』)

### 実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



#### ■ 第三百三十一回

七月九日開催、出席十一名。

第七十六巻ローマ市の記(下)。

この時点での使節団の構成メンバーは、岩倉大

使、伊藤副使

ほか、計十三、十四名。五月十三日朝、一行はエマヌエーレ二世に謁見。久米は国王の人物評を残してないが、フランス・チエール大統領の評言を『実記』に書き込んでいる。曰く、「蓋シソノ成烈ヲ見ルニ常人ニ優ルル万ヲナルモノアリ、其民ハ憐ニシテ振ハス、其兵ハ気モ亦恒潑ノ氣象ニ乏シキヲ覚ウ、此民ヲ用ヒ、此兵ヲ以テ、此偉業(イタリア統一)ヲナス、是最モ及ハサル所ト謂ウヘシ」と。

久米は、遷都後二年しか経っていないローマの混乱ぶりに目を見張る。放置された古代の遺跡を目撃すれば尚更か。とはいえ、カトリックの大本山に入って、『実記』はその華麗なる様子を細やかに書き留めていて、明治の日本人も当今の日本人も、その物珍らしさに変わりなく、とは言え装飾過多にうんざりしている様子が見て取れる。

ゲーテ、ハイネやアンデルセンなど、いづれも文明先進国イタリア、情熱の地中海に憧れた。いわゆる教養の「ブランド・ツアー」時代から「トーマス・クック社」の時代へと進化する丁度その折に、使節団は、すでに英・仏・独・露を歴訪、いまや目も肥えた、レッキとした「グレート・グラランド・ツアー」の一行として、ナポリ、ヴェネチアを経て、余裕を持ってオーストリア(万国博覧会)、スイスへと視察を続ける。

(報告者) 桑名 正行

#### ■ 第三百三十二回

九月十日開催、出席九名。

第八十一巻、ウィーン市の記・ハンガリー略説。

久米は情報をもとに、ハンガリー国の概要を、歴史・地理を含め五頁に亘って述べている。これは「ハンガリーを比較的详细に分析した日本人

の手になる最初の記念碑的記述(ハンガリーを知るための四十七章・明石書店)」とされている。久米はハンガリー人を日本と同じアジア起源の民族(匈奴)と認識し(後年の研究でマジャール人はフィン族では無く、フィン・ウゴル語族とされている)、又(長年他国支配に苦しんだ末、現状はオーストリア皇帝による二重帝国であると言え)丁度明治維新とほぼ同時期に自治を勝ち取り、近代化が始動した国として捉え、我が国の発展をも見据え、ハンガリーの現状を分析している。「国土の割りに人口が少なく、労賃の高いハンガリーに於いては、先ず末端に届く交通網の発達に全力を挙げ、農鉱工共に効率の良い機械化を推進せよ、加工品目をも増す努力をすべきである」とし、ここ数年の鉄道施設及び機械化の努力は表面的で、あまり実効を伴っていないことを指摘している。同時に、匈国は最近認識を新たにし、奥国の博覧会にて夥しい機械注文を行っている。そして曰く、「顧フニ：世界ノ文明、相開クルノ深淺ヲ論スルハ、約五十年乃至百年ノ事ニスギス、今日開化ノオクレタル匈国ハ、此ニ附記セル匈国ノ景況ヲミテ、必ス感ヲ生スルモノ多カラン」。

同じアジアにルーツを持つ国として日本に親近感をおぼえるハンガリー、悲惨な両大戦を経てのその百年後、一九七三年も未だ鉄のカーテンの内、やつと一九八九年ソ連の戦車が撤退し、「汎ヨーロッパ・ピクニック」開催がベルリンの壁崩壊を促した事は記憶に新しい。

(報告者) 浅生 庸子

### 英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp



#### ■ 第七十三回

七月十六日、出席六名。第五章ベルギー国の記上。

パリから鉄路ベルギーに入り、ブラッセルで王宮にレオポルド二世を表敬訪問後、綿花紡績場、植物園、タウンホール、麻製造場、砲台、ガラス工場、製鉄所等の件を読んだ。相変わらず精力的に各所を訪問し、久米がそれらを詳細に描写していることや、鉄と石炭が欧州経済発展の原動力なること、また小国の独立維持のためには軍事力維もが欠かせないことなど冷静に理解しているのは印象的だ。

なお、「シヴィルエンジニアの場ありて」という久米の記述が不明確だったが、英訳

が「民生用機器の製造工場」と補足しているのは妥当のように思われた。

(文責) 岩崎 洋三

#### ■ 第七十四回

九月十七日、出席六名。第五十一章ベルギー国の記下。英文を交代で朗読。それに連れてFestschriftの和訳の紹介、説明が行われる。疑問点、問題点のうち、原書にある「ワクゴン」なる言葉についてかなりの時間を割いて討議した。この用語については、現代語訳の訳者注では、「ワゴン」と取って、ここが車体工場であると考え、・・・おそらく誤りであろう」とあるが、久米は聞こえた通りの言葉を書いたと思われ、「ワゴン」にちかく、Notesに会社のフルネームが仏語で文献とともに記されていること、ワゴンは、仏語では、鉄道専門用語で貨車(客車は、別の言葉がある)であること、などから、必ずしもゴビング氏の誤りといえるかどうかという指摘があった。結局この工場で、貨車が、部分的にでも製造されていたかどうか不明なため、結論は得られなかった。

(文責) 永島 脩一郎

#### ■ 第七十五回

十月十五日、出席六名。第五十二章オランダ国総説。鎖国時代からわが国と関係





歴史部会 (9月24日)

の深いオランダの歴史、地勢、政治、産業、国民性、社会インフラ等の概要紹介とベルギーからオランダへの旅行記の一部が記述されている。その英訳テキストを分担して音読し、英訳書の注記を日本語訳して理解を補い、解釈の差など問題点を議論した。

注記の中で、鎖国についての久米の見方が指摘され、エンゲルベルト・ケンペルとその著作『日本誌』についての言及があった。ケンペルは十七世紀から十八世紀にかけての日本社会の情勢を初めて西欧社会に紹介しているが、「鎖国」と言う一般的な言葉は、十九世紀の始めに翻訳された時に造語されたということである。この間一世紀以上にもなる時間的な経過があり、内容も変わって来ている。またオランダの国民性として一般的に潔癖で儉約家であり、資源もないが、勤勉で粘り強く寒冷の低湿地を開拓

し、一方海外進出で貿易を振興して、国富の創出していることを評価している。

(文責) 小林 養丈



### 歴史部会報告

連絡 小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

#### 講演会

九月二十四日、五百旗頭薫氏を講師に招き、『大隈重信・井上馨と明治国家』をテーマに講演会を開催。出席者は、二十一名。

講師の五百旗頭薫氏は日

本政治外交史を専門とし、特に条約史に精通した、東京大学社会科学研究所准教授である。明治国家は、アヘン戦争を教訓にして明治維新を成し遂げた日本が、国民国家を目指して、文明化とナショナリズムがあざなえる縄のよう絡みあって進展し、現在も我々はその縄の上を歩いているとも言える。

それは、また大隈重信と井上馨の関係にも言える。ふたりのように、時に睦みあい、時に反発しあったライバル的役割をになった。岩倉使節団の留守舞台を担った二人は、使節団帰国の直後の、征韓論に起因する明治六年の政変で、

文明国になるために、内治を優先して条約改正を目指した岩倉上奏文をきっかけで、ふたりの構想が分岐する。雷光(公)とも言われた井上はま

ずは経済の自立と立憲制を目指し、財界指南役と国会開設漸進論者となった。エリート主義の大隈は大蔵省に財政、外交の権限を集めて、殖産興業と国会即時開設で、政治参加者からの税収による財政安定優先を狙った。こういう二人のつながりの悪さが、逆に明治国家を通じて、ある種のパネとなって、透明性への要求を生み、政策の質が高まるといった逆説をも生んだ。

井上の最大の貢献は、外務卿・外務大臣時代(一八七九〜一八八七)の関税引き上げ、領事裁判廃止等の不平等条約解消へ向けて、精力的に各国との予備会談を進め、条約に有効期限をつけ、内地開放・法権回復交渉の端緒を築いたことがあげられる。それが逆に、条約改正反対運動を惹起して、在任中に実現しな

かったが。そして、民に移つて、三井など基幹産業を育てるのに貢献した。首相には遂にならなかつたが、その欲もなかつた。

義の徹底で、対抗しようとした。明治初年の財政の確立、廃藩置県の断行、その後の早稲田大学創設や、憲政党を組織し、最初の政党内閣(隈板内閣)を成立させた。さらに『開国五十年史』、『開国体制史』などの編纂で、歴史を言語化した功績も特筆される。大隈は、官に未練を残しながら、時に民に追いやりながら、民間で三菱などを育てたが、赤面するほど演説嫌いでありながら、喋りだすと止まらなくなり、本音をぶちまけたりして、最後まで政治から抜け切れなかつた。対華二十一ヶ条要求は、そういう大隈の体質とも関係するとも言える。

現在の、日本の政治も、戦後の日米安保からの主権回復的側面や、グローバル時代の主権とは何かの問題。条約で守られている主権もありうるのか。条約に秘めるグレーゾーンとの付き合い方。態々、対立を作って論争し、論争を通じ政治を浄化する手法など歴史学から学ぶことは極めて多い。民主党政権の成立は、国民に政治を身近に考えさせる格好な機会でもあるというのが講師の主張でもあった。五百旗頭氏の次の目標は日米安保条約の研究だという。期待したい。

(文責) 小野 博正



### 関西支部報告

連絡 難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

第四十五回  
七月十一日、出席者は八名。

第二編 (巻) 英吉利国の総説を輪読。

英国は絶頂期であつたが、今なお世界に存在感を示している。

我が国も、英国の歴史から何か学ぶことが出来るのではないか、と、出来るだけ広い視点でも見て行くことにした。

今回は「英国の産業国家として成熟への歴史―岩倉使節団が見た大英帝国への道程とジェントリーの役割」という命題で話しあつた。ジェントリーは貴族階級に準ずる大地主で、全英で精々六千〜一万程度の数でありながら、今日までリーダーシップの中核としての機能を発揮してきたことに注目した。

『実記』が各国ごとにその時点で「横断的に産業や社会を詳細に記述」していることを評価しつつ、当時の目標であつた産業国家として一応成熟した我々は、『実記』から「今後役に立つことを縦断的な歴史的視野で読み取れば」と願う次第である。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人  
「米欧亜回覧の会」ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。  
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

**会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回、全体例会があります。

**部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

**機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

**会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

**事務局** 「米欧亜回覧の会」  
〒112-0006  
東京都文京区小日向 2-26-3 山田方  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690

**入会申込**

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。

なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

**ホームページ**

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等  
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

\*お知らせ欄も時々チェックしてください



**<催し案内>**

2009年10月～12月の予定です

**☆10月全体例会**

日時：10月18日(日)  
会務報告 13:30～14:30  
講演 14:45～17:30  
懇親会 18:00～20:00

テーマ：建国60年を迎えた中国

ゲスト：国分良成氏(慶應義塾大学法学部長)

場所：国際文化会館講堂 03-3470-4611

懇親会 国際文化会館セミナールームD室

会費：例会 2,500円、懇親会 4,000円

**☆実記を読む会**

日時：11月12日(木) 18:00～20:30  
12月10日(木) 18:00～20:30

場所：国際文化会館

会費：1,000円

**☆英訳実記を読む会**

日時：10月15日(木) 18:30～21:00  
11月26日(木) 18:30～21:00  
12月17日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館

会費：1,000円

**☆歴史部会**

日時：11月16日(月) 18:00～21:00

講演：小村寿太郎と加藤高明

講師：深津真澄氏

場所：国際文化会館 D会議室

会費：1,000円

**☆企画委員会(第1回)**

日時：11月4日(水) 18:30～21:00

テーマ：当会の問題点と今後の活動案(自由討議)

\*有志の参加をお待ちします(4頁参照)

場所：国際文化会館

**☆関西支部**

日時：12月5日(土) 13:00～16:30

テーマ：第46回例会

場所：大阪弥生会館

**編集後記**

◇前号で、溜まっていた部会報告を一気に掲載したこともあり、記事不足で発行が大幅に遅れたことをお詫びいたします。急遽、多田さん、浜地さんに寄稿をお願いし、「平成の米欧亜回覧」として五頁に掲載いたしました。今後も会員の皆様による寄稿のシリーズ化を検討していきたいと思っております。

◇ホームページの会報アーカイブをみると、一九九八年一月に、例会の二部として新春交歓パーティが行われ、『最初に「ポンケ・パーティ」の由来が語られ、「岩倉使節団が新年を迎えた太平洋上の船上での新春パーティに因んだ趣向」との披露があり、ポンケ(パンチの意)なるカクテルで乾杯して新春を祝った。』とあります。これが契機となって、翌年から国をテーマとした新年懇親例会が開催されてきたことが分かります。

◇十二年間欠かさず開催してきた山田副理事長を中心とする幹事の皆様の実行力に感嘆するとともに、会のリニューアルを目指して新設される企画委員会に期待します。次の「十二年」に橋をかける「ポンケ・パーティ」は何になるのでしょうか、楽しみにです。